『美し国（うま）づくり～川と人～』

特定非営利活動美し国づくり協会（理事長・進士五十八東京農業大学教授）は4月14日、川崎市幸区のソリッドスクエアホールでシンポジウム『美（うま）し国づくり～川と人～（市民主導の「多摩川プラン」を全国発信）』を、国土交通省、川崎市の後援を得て開催した。シンポジウムは、川崎市の阿部孝夫市長による基調講演「ふるさとの川の風姿を活かしたまちづくり」を受け、阿部市長と鈴木研司関東地方整備局京浜河川事務所長、松井隆一元川崎市多摩川プラン策定市民会議代表、ジャーナリストの水戸部浩子氏をパネリストに招き、進士理事長（元川崎市多摩川プラン策定委員会委員長）がコーディネーターを務め、「河川と人のくらし」をテーマに会場の意見も取り入れながら展開された。基調講演、パネルディスカッションの概要を紹介する。なお、同シンポジウムは（財）河川環境管理財団の助成を受けている。

市民、行政、専門家、学生…シンポジウム会場は幅広い分野の人々で満席となった

基調講演　ふるさとの川の風姿を活かしたまちづくり

記憶に息づく「母なる川」多摩川

阿部孝夫市長

川崎市全体の景観を考えてみた場合、広大な河川空間を有する多摩川が、その主軸、骨格を形成します。多摩川を「ふるさとの川」「母なる川」としてとらえた場合、川崎市民のシンボル的存在でもあり、記憶の中に息づく、大きな風景でもあります。

川崎市は、2005（平成17）年6月に完全施行された景観法を受けて、現在、景観施策のマスタープランとなる「川崎市景観計画」を策定しています。

景観形成の基本理念は、「かわさき百年の風土記づくり」とし、サブタイトルを「魅力ある景観の広がりが風景を育て、時を重ねて風土を紡ぐ」としています。

「景観十年、風景百年、風土千年」という言葉もあるようですが、ここで言いたいのは、社会状況がめまぐるしく変化する中においても、都市の景観形成は、長い時間の積み重ねが非常に大切である、と言う考え方なのです。

発見し調和させ受け継ぐ

市の景観形成においては、長い年月を経ても価値感を失わない魅力ある景観を創造することや地域の大切にすべき資源を発見し調和させながら受け継ぐことが大切であると考えています。

市の景観の特徴は、大きく五つほど挙げられます。

特徴の1点目は、「川・海・緑に囲まれた背山臨水（はいざんりんすい）の景観」です。背山臨水とは、「山を背にして川や海に臨む地」という意味で、風水の思想において、最も良い環境とされています。市は、多摩丘陵を背にして、多摩川や東京湾などの水辺空間に臨んでいます。これは、川崎市の地形的な骨格であるとともに、景観の重要な資源にもなっています。

次に、「大規模な土地利用転換と連動した新たな都市拠点の景観」です。川崎市の現在の都市拠点は、江戸と地方を結んでいた旧街道沿いに発展した宿場町にできています。当時は、縦の結ぶつきがそれほど強くなかったために、個々の宿場町が独立して存在し、栄えた場所が、現在の都市拠点として個性を高めています。

近年では、工場跡地などの大規模な土地利用転換と連動した再開発事業により、新しいまちの顔となる都市景観が形成されつつあることを特徴としています。

3点目は、「自然を上手に使いながらつくり上げた農村景観」です。多摩丘陵に残る市街化調整区域の麻生区黒川、岡上、早野地区は、緑の基本計画において『緑と農の3大拠点』と位置づけられており、その土地の自然を上手に使いながら守られてきた農村景観を特徴としています。川崎市では残り少ない貴重な景観資源ですので、みんなで知恵を出し合って、守り続けていかなければと考えています。

ダイナミックな産業景観も

川崎市の臨海部は、重工業地帯なので、灰色のイメージで語られがちですが、物づくりの拠点であり川崎市発展の原動力でもあるのです。高度経済成長期を支えてきた京浜工業地帯の中核を成す、臨海部のコンビナートやタンクは、活力あるダイナミックな産業景観を特徴としています。

最後は、「水の恵みの面影を伝える多彩な水辺景観」です。多摩川が細長い本市の地形に沿って流れており、多摩川から引き込まれた二ヶ領用水は、平野部のほぼ全域を流れていました。多摩川や鶴見川とそれぞれの水系の小河川は、昔の名残を残しながら、多彩な水辺景観を形成しています。

現在策定中の景観計画では、今説明した5つの景観の特徴をふまえて、川崎市の景観の骨格を都市拠点、景観軸、景観ゾーンの3つの要素で捉えています。

特に、4つの景観ゾーンでは、多摩川や鶴見川の沖積平野として形成され、その水の恵みで育まれた平野部を「水のゾーン」としました。また、5つの景観軸では、多摩川軸、二ヶ領用水軸、多摩川崖線軸などを位置づけています。川崎市の景観を考えるとき、多摩川が持つ意味は非常に重要なものであることがお分かりいただけると思います。

多摩川をステージにライフスタイル提案

多摩川プランは、川崎市が今後どのように多摩川に対して取り組んでいくのか、その姿勢を示す、決意表明でもあり、その取り組みは、たんに行政だけのものではなく、市民や企業、学校、国や県、対岸の自治体も含めた多摩川流域の自治体を含めた、それぞれの連携と協働のパートナーシップによって、達成されるものです。

多摩川プランの基本理念は、「川とふるさとの再生、市民協働による多摩川ライフの創造」です。

この基本理念を踏まえ、多摩川を『理解』し、『整備』・『保全』するという3つの基本的視点から、①ふるさとの川・多摩川を育む②多摩川の風景づくり③市民に身近な多摩川へ④運動施設の利便性向上⑤子どもの生きる力を育む場の創造⑥生命の賑わい豊かな多摩川へ⑦参加と協働による川育て――の7つの基本目標を掲げ、30の施策の方向性、55の推進施策、3つのリーディングプロジェクト、6つの重点エリアを定めています。

3つのリーディングプロジェクトの1つめは、「生命（いのち）の再生プロジェクト」です。2つ目は、「川崎っ子プロジェクト」です。多摩川水系における子どもたちの環境学習を推進します。3つ目は、「みんなで行こう多摩川プロジェクト」です。誰もが行きたくなる魅力的な多摩川を目指します。

多摩川プランの実現は、いうまでもなく行政だけでは不可能です。「協働」「連携と支援」「進行管理と評価」の3つに重点をおいて推進していきます。

多摩川の広大な河川空間の存在は、川崎市民にとってのアイデンティティーそのものだと思います。「多摩川プラン」は、多摩川をステージとしたライフスタイルプランです。今後も、さまざまな取り組みを通して、市民のみなさんとともに、多摩川をより魅力ある空間に、育て上げていきたいと考えています。

言葉の魔法？「最後の清流」

水戸部　きょう、資料として配っていただいた本（『名川紀行』）の帯と序文は山田洋二監督です。監督が撮られた『男はつらいよ』は49本製作されましたが、その中で川の場面が出てこない映画は一本もないのです。監督によると、川が出てくることによって人の心が和み、映画の印象が全然違うそうです。

私は、山形県の開発したものが今はどうなのか検証する『山形県開発史』を14年かけて書きました。そのときの資料に、「低開発」という言葉が盛んに出てくるのです。語源を調べたら、エドワード・A・アッカーマンという進駐軍で来ていた顧問が、日本には資源がない、先行き暗いと国民がうなだれているときに、「日本には資源がある。何よりもこんなに清く美しい水があるじゃないか」と言い、元気づけたそうです。

山形県は戦後まもなく、低いところに水が浸透していくように「低開発費」という予算をわざわざつけたわけです。水が資産だと外国人に言われてその気になって、日本のある意味の戦後の復活を意味づけた。

言葉は大事ですね。四万十川は「日本最後の清流」と言われますが、その気になって見に行くと、地元の人たちは、「鮎は獲れなくなったし、川は汚れたし、マナーは悪いし、10年前はこんな川ではなかった」とおっしゃいます。でも、マスコミがあれだけ取り上げると定着してしまって、四万十川よりきれいな川はないのではないかと思ってしまう。それを確かめるほどみんな暇ではないし、そういうチャンスもないので、何となく言葉の魔法にかかってしまう。

多摩川はきっとニュープランでイメージアップされるだろうし、こう変わったというふうに『名川紀行』の続きで）書いてみたいと思います。

上流の森との関係は非常に重要で、皆さんが源流との交流を進めておりますので、多摩川プランによって一層お互いの交流が盛んになるようにと願っております。プランを策定する過程でも、源流の方々にも参加していただいて意見交換をやっておりますので、これからも進むと思います。

もう1つは、多摩川の流域の協議会がありまして、たまたまことしは私が会長をやっていまして、近いうちに会議があります。そういうところで議論をしながら協力していきたいと思っております。

流域圏ごとの行政組織も

鈴木　地方自治体間の連携ということですが、実は先日、最上流部にご挨拶に行ったのですが、小河内ダムの奥多摩の上に山梨県の2つの村があります。東京都の自治体であれば下水道整備のときに補助が出る。ところが小菅村や丹波山村で下水道を整備しようと思っても東京都から山梨県の村に補助は出せないようでございます。山梨県にも補助制度はあるでしょうが、東京の水のために何で補助するのだと言われるかもしれない。

ということは、流域圏構想といいますか、水に関しては水道や下水道や河川をみんなひっくるめた行政組織があってもいいのではないか。例えば道州制という話もありますが、流域圏を「多摩川州」とすると、いろんな水の問題をひっくるめた上下流の交流ができて、行政の制度上もいい方向になるのではないかと言っている人もいます。実際にできるかどうか分かりませんが、河川流域ごとに地方自治体のような単位があったらいいと思います。

川、水、緑にはすごいものが

松井　人の美しい表情をとらえてカメラで撮ったことがあります。川の活動がずっと続いているのは、参加した大勢の方々がとてもいい表情をするのです。川はどんなふうに流れてくるか、川はどんなふうにえぐられていくものかというのは、現場に足を運ばないと分からない。ぜひ現場を踏まえて見てほしいという願望があります。

多摩川プランの中で、「現場を重んじる」ということが再三出てきましたし、ごみ問題とか、子どもたちが川に近づくための施策があります。昭和40年代は学校で「良い子は川に近づかない」というお触れを出して、それ以降、空白の20年が過ぎて、良い子は川に飛び込まなかったので す。最近は揺れ戻しの再教育をやっていますが、いいお師匠さん、いい指導者の下でやってほしい。たぶん多摩川は大丈夫だろうと思います。

全国を回って感じるのは川にはドラマがあると。そのドラマは人と結びつくことで生まれ、川を愛することによって広範囲な愛が育まれる。そして、川によって交流が広くなる。

川はとても複雑な歴史を踏んできていますから、歴史的な背景も重ねて、住民との共同作業でないといい川はつくっていけない。いい川だと思うところには必ずいいボランティアが張り付いている。これも全国共通だと思います。きっと多摩川も、満たされているのではないかと思います。

進士　市長さんに直接皆さんのお気持ちを伝えるチャンスですから、ぜひという方はお手を上げてください。

会場から①自治体間の連携②地域活動への支援③総合学習――などについて質問、意見が出される。

近隣自治体と相互に協力

阿部　人口当たりの都市公園の面積は、一番少ないのは大阪市ですが、川崎市も非常に少ないので、多摩川を都市公園のような形で使うと同時に、もう少し自然公園のような形で活用していく。あとはオープンスペースとして水の上も大事に使っていきたいと考えています。

東京都との関連ですが、プランそのもので東京都側と調整することはやっていませんが、例えば「丸子の渡し」を復元しようとか、具体的に出てきたテーマごとに東京都側と相談したり、意見交換したり、相互に協力することを進めていきたいと思っております。

河川敷については東京都側の方が全体としては整備されています。川崎側はもっと使いやすいように自然豊かに整備していく必要があると思っております。

川が南側にある方が使いやすいものですから。東京都側は進んでおります。地球温暖化防止のために、風の道ということで多摩川を使おうと思ったら、夏場の涼しい風は南風ですから東京都側に吹く、そして冬場の冷たい風は川崎の方に吹くというハンディキャップがあるのですが、そういうことも理解しながらお互いに協力したいと思っています。

上流の森との関係は非常に重要で、皆さんが源流との交流を進めておりますので、多摩川プランによって一層お互いの交流が盛んになるようにと願っております。プランを策定する過程でも、源流の方々にも参加していただいて意見交換をやっておりますので、これからも進むと思います。

もう1つは、多摩川の流域の協議会がありまして、たまたまことしは私が会長をやっていまして、近いうちに会議があります。そういうところで議論をしながら協力していきたいと思っております。

流域圏ごとの行政組織も

鈴木　地方自治体間の連携ということですが、実は先日、最上流部にご挨拶に行ったのですが、小河内ダムの奥多摩の上に山梨県の2つの村があります。東京都の自治体であれば下水道整備のときに補助が出る。ところが小菅村や丹波山村で下水道を整備しようと思っても東京都から山梨県の村に補助は出せないようでございます。山梨県にも補助制度はあるでしょうが、東京の水のために何で補助するのだと言われるかもしれない。

ということは、流域圏構想といいますか、水に関しては水道や下水道や河川をみんなひっくるめた行政組織があってもいいのではないか。例えば道州制という話もありますが、流域圏を「多摩川州」とすると、いろんな水の問題をひっくるめた上下流の交流ができて、行政の制度上もいい方向になるのではないかと言っている人もいます。実際にできるかどうか分かりませんが、河川流域ごとに地方自治体のような単位があったらいいと思います。

川、水、緑にはすごいものが

松井　人の美しい表情をとらえてカメラで撮ったことがあります。川の活動がずっと続いているのは、参加した大勢の方々がとてもいい表情をするのです。川はどんなふうに流れてくるか、川はどんなふうにえぐられていくものかというのは、現場に足を運ばないと分からない。ぜひ現場を踏まえて見てほしいという願望があります。

多摩川プランの中で、「現場を重んじる」ということが再三出てきましたし、ごみ問題とか、子どもたちが川に近づくための施策があります。昭和40年代は学校で「良い子は川に近づかない」というお触れを出して、それ以降、空白の20年が過ぎて、良い子は川に飛び込まなかったので す。最近は揺れ戻しの再教育をやっていますが、いいお師匠さん、いい指導者の下でやってほしい。たぶん多摩川は大丈夫だろうと思います。

今朝、散歩したら、川の横の土手に菜の花がいっぱい咲いていて、その向こうに湧き水の井戸があって、子どもが水を汲んでいる。これは市に要望してつくっていただいた公園です。そういう場ができると市民が自主的に動いてくれて、とてもきれいな町の名所になっていると思います。多摩川も同じように、実際に活動している輪が広がるとそういう状況になってくると思います。そういう町がどんどん広がっていったらいいと思います。

言葉の魔法？「最後の清流」

水戸部　きょう、資料として配っていただいた本（『名川紀行』）の帯と序文は山田洋二監督です。監督が撮られた『男はつらいよ』は49本製作されましたが、その中で川の場面が出てこない映画は一本もないのです。監督によると、川が出てくることによって人の心が和み、映画の印象が全然違うそうです。

私は、山形県の開発したものが今はどうなのか検証する『山形県開発史』を14年かけて書きました。そのときの資料に、「低開発」という言葉が盛んに出てくるのです。語源を調べたら、エドワード・A・アッカーマンという進駐軍で来ていた顧問が、日本には資源がない、先行き暗いと国民がうなだれているときに、「日本には資源がある。何よりもこんなに清く美しい水があるじゃないか」と言い、元気づけたそうです。

山形県は戦後まもなく、低いところに水が浸透していくように「低開発費」という予算をわざわざつけたわけです。水が資産だと外国人に言われてその気になって、日本のある意味の戦後の復活を意味づけた。

言葉は大事ですね。四万十川は「日本最後の清流」と言われますが、その気になって見に行くと、地元の人たちは、「鮎は獲れなくなったし、川は汚れたし、マナーは悪いし、10年前はこんな川ではなかった」とおっしゃいます。でも、マスコミがあれだけ取り上げると定着してしまって、四万十川よりきれいな川はないのではないかと思ってしまう。それを確かめるほどみんな暇ではないし、そういうチャンスもないので、何となく言葉の魔法にかかってしまう。

多摩川はきっとニュープランでイメージアップされるだろうし、こう変わったというふうに『名川紀行』の続きで）書いてみたいと思います。

皆の持ち場で守り育てて

阿部　幸い、多摩川がきれいになりましたし、心のふるさとといっても恥ずかしくないようになってきましたが、まだまだ多くの人たちには知られていない。俳優の中本賢さんが四万十川に行って、多摩川は四万十川よりもきれいだと、はっきり断言しています。ですから、もっともっとよくして使いやすくしていく努力をしていきたいと思っておりますし、こんな素晴らしい広大な場所があるわけですから、みんながそれぞれ自分たちの持ち場で、守り育てていくことが非常に重要ではないかと思っております。

みんなで力を合わせて、進めていきたいと思いますので、どうぞ皆様方、ご協力よろしくお願いいたします。

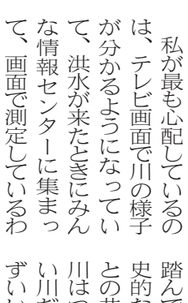
川は大都市の最後の生命線

進士　都市化は文明の必然ですからやむを得ないのですが、そのときに人間の知恵がなければならない。建物の高さをどうコントロールするか。川辺は低くて遠くに行って高くなるとみんながオープンスペースを共有できるわけですが、現実の都市計画の制度では、川のそばでは日当たりの問題や日照権がないのでどんどん高いのがつくれる。川の素晴らしさは135万川崎市民全員のものです。大きな都市にとっては川は最後の生命線です。市街地には緑地が500分ちょっと。それと同じだけ多摩川にある。ですから緑が倍になるんです。どう自然を豊かにし守っていくか、付き合い方を工夫して壊さないように利用するかということです。

多摩川プランには、市民の皆さんの多くの夢が入っているわけです。これは単に河川の個別計画ではないのです。川崎市の総合計画なのです。

川を使いながら、自分たちがアイデンティティーを持てるような、誇りが持てるような川崎市をどうつくるかということです。それを多摩川を通してやっていこうということです。全く新しい川崎市に向かってのスタートが切られるのだろうと思います。

パネリストの皆さん、会場の皆さん、本日はありがとうございました。（拍手）



鈴木研司氏

松井隆一氏

水戸部浩子氏

進士五十八氏